近江商人の知恵と理念を現代に生かす情報紙

三方よし（さんぽう）

第53号
2024／12

CONTENTS

特別寄稿：近江商人の暹羅屋勘兵衛：現在の日・タイ関係の適当な象徴？ …… 2
岩手滋賀県人会・近江商人末裔会設立50周年記念式典開催 …… 4
盛岡の風土と近江商人 …… 6
てんびん棒 …… 12

盛岡市中津川にかかる上の橋。欄干の擬宝珠は国指定文化財

400年前、33日と14時間という膨大な時間をかけて近江より青雲の志を抱いて来盛した人たちは、途中で何が起こるかわからないため、仏様を背負っていたそうです。その人たちの修業した所が、上の橋（かみはし）の「草鞋脱ぎ場」です。それこそ「汗と涙」の場所でもあります。成功した人、時代の流れにのれず消えていった人、又、志半ばで亡くなっていった人たちが沢山おられます。この度建立した記念碑は、その人たちが無念さと悲しみから故郷に向かって手を合わせている「碑」でもあります。

記念行事の前日に旅立たれた初代会長吉住俊彦氏、除幕式に喜んで出席していただき、その年の12月に旅立たれた三代目会長小笠原三吉氏、また15年前より提案されていた音羽会会長村谷喜一郎氏等、県人会重鎮たちも今は浄土より喜んでおられると思うと、建立するのに苦労はありましたが幸せです。きれいな中津川のほとりで、鮭が遡上するのを眺めながら！

幹事長　駒井健治

（近江商人来盛四百年記念誌より。役職名は当時）

特別寄稿

近江商人の暹羅屋勘兵衛 現在の日・タイ関係の適当な象徴？

ターヴィト・マリツ氏

アユタヤの山田長政

暹羅王国（現在のタイ王国）の旧首都であるアユタヤは、多くの日本人にとって伝説的な山田長政を思い起こさせる場所だろう。

江戸時代初期に商業港でもあったアユタヤへ渡航した山田長政は、日本人町と日本人傭兵隊の司令官にとして活躍して、プラヤー・セーナーピムックと言う官位を受けられた。結局宮廷政治に巻き込まれて、１６３０年に南タイ戦場で負傷したか、敵に毒殺されて死んだ。暹羅における彼の栄枯盛衰は、日本だけでなくオランダの資料にも記録されている。

そもそも日本人を東南アジアの王国に呼び寄せたのは冒険ではなくて貿易だった。琉球列島からの商人は、暹羅への最初の渡航者だったが、16世紀以降、商船はモンスーンに乗って、チャオプラヤ川と南日本を行き来するようになった。最初に日本商人は熱帯に短期間滞在し、風の変化とともに日本に戻って来た。交易量が増えるにつれ、残る者も出てきたのだろう。アユタヤへ渡航した、内乱、関ヶ原の戦い、大坂の役などで領主を失った浪人たちや、キリシタンもその数を増やした。

山田長政は、アユタヤだけでなく、東南アジアの日本人町の住人の中で最も有名だろう。江戸時代には、彼に関する装飾された文章が人気あり、国学者の平田篤胤さえ山田長政を「大日本魂」の模範として挙げた。帝国日本では、山田長政は国民的英雄となり、南進の先任者となり、教科書には必ず登場した。近代日・タイ外交関係樹立50周年に際して１９３８年アユタヤの日本人町跡地に山田神社が建立された。戦後、日本の植民地を失ったことで、山田長政は多くの人気も失った。しかし、小説や映画はこれまでいくつか制作されてきた。

また、静岡市の浅間（せんげん）神社には、山田長政が暹羅から送ったとされる絵馬（本物は１７８８年火事で焼失したため、現在の絵馬は模写である）が所蔵されていることから、１９８６年から浅間通り商店街は「日・タイ友好長政まつり」を開催している。１９８７年、日・タイ外交関係樹立１００周年を記念して、山田神社があるアユタヤの日本人町跡地に博物館と公園が建設されて、その中には山田長政の銅像も建てられた。現在でもそのアユタヤの日本人村（旧日本人町跡）は人気がある観光名所となっている。しかし、タイでは、外国人にとして王国の内政に干渉した山田長政や彼に関する日本の物語が、植民地化されたことのないタイでは実は常に多くの人に懐疑的な見方をされていたのである。

アユタヤの山田長政像

近年の日・タイ関係のシンボル マリア・ギオマール・デ・ピーニャ

近年タイでは、ギリシャ人冒険家コンスタンティン・フォールコンの妻であったクリスチャンの日系人、マリア・ギオマール・デ・ピーニャが日・タイ関係のシンボルとして受け入れられているのは、そんな理由もあるだろう。山田長政と同じように後継者争いに巻き込まれた夫が没落した後、彼女は2年間ぐ

（筆者紹介）
ダーヴィト・マリツ氏は、ドイツ日本研究所（東京）の主任研究員。マンハイム大学およびハイデルベルグ大学で修士号（経営学、日本学）を、ミュンヘンのルートヴィヒ・マクシミリアン大学で2016年に博士号（日本学）を取得。博士論文のテーマは日本とタイの関係史。2015年から2021年にかけてバンコクの大学に勤め、2021年に入所したドイツ日本研究所では日本・東南アジア、特に日・タイと日・メコン地域の関係・交流についての研究に取り組んでいる。近江商人の東南アジアへの渡航についても調査中。

らい奴隷になった。しかし、そのあとは王宮台所の菓子部になり、ターオ・トーンキープマーと言う官位を与えられた。２０１５年には、アユタヤの日本人村(旧日本人町跡)の新展示ホールに彼女の蝋人形が建てられた。しかし、亡命キリスト教徒の子として遠い暹羅に生まれ、日本に来たことがなく、ポルトガル語名で知られている彼女は、日本ではほとんど知られていないだろう。その理由のため、マリア・ギオマール・デ・ピーニャも日・タイ関係のシンボルとして適当ではないのだろう。

マリア・ギオマール・デ・ピーニャのろう人形

この数年間、日・タイ関係だけでなく、日東南アジア関係全般が以前よりずっと対等になりつつある。以前とは対照的に日本から南のタイ王国への投資や観光者だけでなく、タイから北の日本への投資や観光客も増えている。そして、日・タイ関係の主柱は間違いなく経済関係である。

こうした観点から、近江八幡の商人たちの中に、現在の日・タイ関係の象徴になることができそうな歴史人物に焦点を当ててみよう。

アユタヤの八幡商人

近江商人は日本列島を横断して交易網を築いただけでなく、江戸時代初期に朱印船で東南アジアまで足を伸ばしていた。よく知られているように近江八幡の日牟礼八幡宮に、ベトナムの安南に渡航した西村太郎右衛門が送った、重要文化財に指定されている朱印船の絵馬が展示されている。

アユタヤが当時の日本人貿易商にとって最も重要な港のひとつであったことを考えると、兵庫県高砂の有名な天竺徳兵衛や、京都・堺・名古屋などの豪商以外にも、近江からアユタヤに向かった商人たちがいた。そのうちの一人の名前は知られている。

１５６６年に近江八幡に生まれた勘兵衛はアユタヤに渡航して、暹羅王都で染色技法を習得した。無事に日本の故郷に帰った後、八幡町（現近江八幡市）で暹羅屋と言う繊維店を設立した。

暹羅屋勘兵衛と呼ばれるようになった彼は84歳で亡くなったが、店の暹羅屋は明治時代まで続いた。残念ながら、彼の名前はよく知られていないし、かつての暹羅屋の場所は現在記念碑などにもないコインパーキングである。しかし現在の言葉で文化交流の促進に成功したスタートアップの創設者だったと言えるだろう。したがって、暹羅屋勘兵衛は、両国が対等かつ共創的なパートナーという認識を受け入れている現在、日・タイ関係の適当なだけではなくて魅力的な象徴ではないだろうか。

そして、近江商人であった暹羅屋勘兵衛は日本・東南アジア交流の歴史において重要な人物であると認識されることで、東南アジア諸国からの観光客も近江八幡に増えて、近江商人の歴史も世界にもっとよく知られることを期待したい。

暹羅屋跡のパーキングに立つ著者

岩手滋賀県人会・近江商人末裔会 設立50周年記念式典開催

２０２４年９月22日（日）、盛岡市ホテルメトロポリタンニューウイングにて、岩手滋賀県人会・近江商人末裔会の設立50周年記念式典が開催された。三方よし研究所からも５名が参加。県内各地からの世代を超えた会員さんが多数ご参集。

全国滋賀県人会連合会からは副会長の平居匡宏氏（静岡滋賀県人会）が来賓としてご参加され、顧問の村井宏さんもお元気なお姿でご参加。総会・三方よし研究所岩根順子専務の記念講演に続き、その後は和やかな懇親会となった。懇親会は厳かに宝生流能楽師の金野泰大氏の仕舞いから始まり、岩手放送平塚奈穂美さんの司会で進行。昨日からの寒気をも吹き飛ばすような熱気に終始包まれていた。

前列右から村井宏顧問、村井研一郎会長、平井匡宏全滋連副会長
後列右から片桐理事ご夫妻、片岡修次期岩手滋賀県人会会長、岩根専務理事、副会長駒井健治さん、中澤副理事長、高橋理事

来盛４００年を盛大に開催

当会は名称が示すように、司会ご担当の平塚さんのように東近江市のご出身で盛岡に住まいしている方が在籍されている一方で、現会長の村井研一郎さんは１８５７年創業の株式会社村源代表取締役会長だが、ご先祖の６代目が盛岡にやってきたという。つまり、滋賀県出身者で岩手県在住の人と岩手県生まれではあるが近江商人の末裔にあたる方々で構成されている。

１９７４年の設立時は「盛岡滋賀県人会」として発足したが、１９８５年には「岩手滋賀県人会」と名称変更した。その後、４代目会長に就任した駒井健さんを中心に、今後の活発な県人会活動を推進するために、近江商人をご先祖に持つ末裔の方々との滋賀県出身者とが融和のある会の活動をめざしていこうと現在の名称となった。

当会では、２００９年から近江商人来盛４００年記念行事を展開し、盛岡での近江商人の始

来盛400年記念事業として建立された「草鞋脱ぎ場　記念碑」
盛岡市中津川右岸上の橋たもと（盛岡市有地）
揮毫は北峯閣願教寺第28代住職島地興霖氏による

祖村井新七店舗跡地に「始祖　草鞋脱ぎ場」の記念碑の建立や講演会の開催など多彩な行事を繰り広げた。こうした当会の活動の様子は地元岩手放送が「商人来たりて国富ます」という番組を制作し、のちにびわこ放送でも放映された。

「近江商人来盛４００年記念」事業は２０１２年の記念誌『わが先達の第一歩は、三十三日と十四時間の旅路より』の発刊で終了した。２０１４年には近江八幡商業高校の天八商店がやってきている。

岩手滋賀県人会・近江商人末裔の会の足跡

当会は、１９７３年当時、盛岡市助役であった吉住俊彦さんが初代会長に就任され、親睦を中心の活動を続けてこられたが、結成10周年に当たる１９８５年には岩手滋賀県人会と名称変更し、この年『盛岡商人伝』を発行している。

滋賀県であきんどフォーラム開催の計画が浮上すると１９８９年には、盛岡ターミナルホテルで「あきんどフォーラム東北大会」が開催され、この時パネラーとして参加した駒井健（当時岩手大学教授）さんは、翌年に会長に就任し、今後の活発な県人会活動を推進するために、近江商人をご先祖に持つ末裔の方々との融和のある会の活動をめざして「岩手滋賀県人会・近江商人末裔会」と名称を変更された。

１９９１年には『近江商人東北の末裔たち』を発刊、国際ＡＫＩＮＤＯフォーラムにも岩手から20名が参加し、その足で安曇川町を訪問、会長の駒井さんはＡＫＩＮＤＯフォーラムではパネラーとして登壇している。こうしたことが契機となって出身地滋賀県安曇川町（現高島市）との交流が盛んにおこなわれるようになり、今日に至るまで若鮎の放流をはじめ、相互の交流が活発になっていく。

２０００年には岩手滋賀県人会・近江商人末裔会と名称変更し、現在に至っている。

２００８年になると3代目会長の小笠原三吉さんから懇願書が届く。

「岩手滋賀県人会・近江商人末裔会として、近江商人が歩んできた証の記念碑を建立し後世に残したい」というものだった。やがて、盛岡にやってきて４００年を迎える、このことをキーワードとして盛岡市との交渉をはじめ、盛岡市制１２０年を迎えるタイミングで事業が動き出した。前述の来盛４００年記念事業として活動が始まる契機だった。

お土産に頂戴した長沢屋の「黄精飴」
1853年、近江の長沢村（現米原市）からやってきた重吉が盛岡城下で飴屋を開いたことが起源の長沢屋。「黄精飴」は南部藩で身柄お預かりの学僧が広めた漢方薬から生まれた求肥菓子で長沢屋の看板商品。

盛岡の風土と近江商人

近江高島から盛岡に出かけた近江商人は、四百年にわたり、かの地に定着し南部藩や地域の発展に多く貢献されてきた。２００９年には来盛四百年記念事業が始まり、村井新七が盛岡にやってきて近江からの人々が収れんした場所には「草鞋脱ぎ場」の記念碑を建立し、講演会など様々な事業の集大成として『近江商人来盛四百年記念誌』を発行された。本年、盛岡に伺った際に村井文治さんのご厚意で本書の一部抜粋分を頂戴したが、ここに村井宏氏および村井研一郎氏の素晴らしい文章が記載されていたので本誌で転載させていただいた。ご厚情に感謝申し上げる。

岩手山と北上川

ふるさとの自然と人

岩手滋賀県人会・近江商人末裔会　顧問　村井　宏

はじめに

来盛近江商人のパイオニアとされる村井新七が、下向し遠野を経由して盛岡に居を定めたのは、ちょうど四百年前の慶長18年（１６１３）の四月十日とされている。平成21年（２００９）の夏に記念碑を建立した北上川支流中津川の河畔は、新七が藩から与えられた街割のできた京町（上（かみ）の橋西詰め）、いまでいう本町通となる。近年まで、ここでご子孫の村井亮さんご一家が麹製造業（麹屋の勘六家）を継いでおられた。ただし、同氏によると元の場所は寮だったそうで、住居はもっとお城に近い場所にあったとのことである。

いずれにせよ、三戸からやってきた南部藩主（利直公）が盛岡城を築く前で、多数の家臣やその家族が住み生活する城下町づくりが急がれていた頃のことで、受け皿づくりに近江商人等が貢献したと考えられる。真っ先に必要だったのは、消費物資の集中で、そのため商人や職人の居留が求められた。おそらく、当時は中心部に住居が散在する閑静な状態で、西の岩手山や東の姫神山、南の南昌山（なんしょうざん）等は、直視できる環境であったと考えられ、北上川の支流中津川の清流は、今と異なり構造物の少ない近自然状況におかれていたと思われる。

まず、近江から入ってふるさとを離れて来た人々には、美しい開発の進んでいない自然や素朴なみちのくの人々と接し、自らの心に、肌にどんなことを感じたのかを推察するために、まず城下町を取り囲む自然の模様について紹介したい。そして、その時代に盛岡が生み出した人材の中から近江商人にゆかりのある二人の人物について取り上げてみる。

岩手山と姫神山

盛岡の西側に立つ岩手山（２０３８ｍ）は、岩鷲山、南部富士ともいわれ、優美な裾野を引く均整のとれた姿は、郷土が生んだ石川啄木や宮澤賢治をはじめ、岩手の多くの人々の心に、古くから深く投影され愛されてきた山と言える。東側から見るこの山はとても端麗であるが、裏の西側に回ればむき出しの岩肌が峨々（がが）たる山容を形成し、全く別の顔を表現することに、初体験の人は誰も驚かされる。

盛岡の街は、まさにこの岩手山によって活きているといえる。現在人口約30万の市街地に、一つの山がこれほど大きく迫っている場所は、あまり例が無いのではないかと誇りに思っている。しかし、この山は活火山で、これまで数回爆発し、その焼け走り溶岩流の跡も見られる。近年も水蒸気爆発なども発生し、一時期入山規制がされた経緯がある。登山は表裏四コースがあり、いずれも早朝に登って夕方までに戻れ、７～８時間の歩行が一般的である。

焼け走り登山口から、山頂まで標高差は１４７０ｍである。登りやすいのは、古くから登拝路として知られる馬返しコースである。この名のように、これ以上車は入れないので、山が荒れることもなく昔からの優れた自然が守られてきた。７合目を過ぎるとハイマツ群落に入り、８合目避難小屋を過ぎると、ハクサンチドリ、ヨツバシオガマ、トウゲブキが彩るお花畑が現れ、山頂付近の熔岩砂礫には美しいコマクサが出迎えてくれる。

昭和10年頃の村源薬局

旧井弥の建物

盛岡城下図

男神を祀る岩手山は、盛岡の北西に位置（隣接の雫石町と滝沢村にまたがる）し、奥羽山脈の最高峰で、基岩は火成岩類である。これに対し、北東に眺められる盛岡の生んだ石川啄木ゆかりの姫神山（1124m）は女神を祀っており、岩手山との夫婦伝説のある優美な姿の山である。2006年までは、姫神山（1124m）は玉山村（旧渋民村を含む）に含まれていたが合併により盛岡市に入った。

啄木の故郷渋民の北上川のほとりには、「やはらかに柳あおめる　北上の岸邊目に見ゆ　泣けどごとくに」という有名な歌碑がたっている。碑の正面には岩手山が聳え、振りかえると反対の東側には姫神山を望むことができる。男山と女山のみごとな対照が無言のままに、訪れる人に物語っている。登山口は二つあって、樹林や岩場などの変化のある一本杉コースが多く利用される。国道4号線の芋田口から徒歩約3時間、この間の標高差は約600mである。

姫神山は、北上高地の主峰「早池峰山」と共に高峰の一つであるが、周辺は準平原と称される古生層からなる緩やかな高原に連なっている。遠くから眺めると、際だってやさしい整った稜線であるが、山頂付近には登山者を圧倒する巨石群に遭遇する。古代から天の神が降り立ち、地の神々が集まる場所とされていた場所であることがうなずける。基岩は花崗岩で比良山系と同類で、山麓には春、美しい清楚なスズランの群生が見られる。ハイキングや子どもたちの遠足の場として評判がよい環境である。

北上川、その支流中津川の清流

盛岡は昔から「杜（もり）と水の街」といわれ、市内を北上川本流、その支流雫石川、簗川、中津川、米内川などが貫流している。街の各地に湧き水があり、古くから生活に利用されてきた。その中核となる川は中津川で、この北側を河北、南側を河南と呼ばれている。河北地域には湿地が多く、安土桃山時代までは、河川の氾濫が激しかったようである。あえてそれを自然の要塞として、盛岡の築城が進められてきた。慶長年間、盛岡開府に際して近江からやってきた商人達は、河北の京町（本町）に集まったとされる。

街の中心を流れる中津川には、春にはワスレナグサ、初夏にはカキツバタというように美しい花を咲かせ、鮎釣り、秋の鮭の遡上はみごとである。平成8年6月には、この川に心のふるさと安曇川の稚鮎2万匹が放流された。清流のバロメーターとして、この川にはバイカモが水中に繁茂し、白鳥の飛来、野鳥類の越冬も見られる。都市にありながら自然環境に恵まれたビオトープ（動植物生息空間）として、市民の憩いの場として、地域の人々や観光客に親しまれている。

この川の源流を探ると、北上高地の岩神山、安倍館山に水源を発し、市内を貫流し本流の北上川に流入している。「京の鴨川にもたとえられ」、上流の河岸や河床には、山地からの地下水が随所に浸出している。琵琶湖は湖であるが、いつも水が川のように流れているといわれる。これは北部の山々から運ばれてくる融雪水や、湖底から湧き出る地下水によるとされる。まさに、清流中津川の水源も、琵琶湖と同じような優れた水環境である。

中津川の上流には市民の水瓶の綱取ダムがあり、そこに500mの円曲線の綱取大橋が架かっている。

橋脚52mという県内最大の高さを誇る美しい橋である。ダム

村井市左衛門

盛岡城

湖と大橋は、背景の緑の環境に包まれた景観美を誇っている。この下流北上川本流まで、15もの橋を数え市内随所にそれがみられる。始祖村井新七がたどり着き、拠点にした「近江商人の草鞋脱ぎ場」も、上の橋のたもとにあり、上流からちょうど10番目の橋である。

近江商人三始祖の一人・村井市左衛門（1633～1686）

村井市左衛門は、新七の同族で、寛永10年に近江国高島郡大溝上古賀で生まれ、幼名市助といい、成人して孝寛と名乗っている。幼少の頃は、出生地大溝にて義姉妙順（福井勘解由左衛門妻）によって養育され、成長して兄源太郎の住む南部盛岡に向かった。残念なことに、盛岡にたどり着いた年月は不詳であるが万治元年（1658）に、盛岡本町の店を兄源太郎より引き継いだ事は確かである。ここから彼の本格的な社会経済活動（酒造業や質店）が開始されたといってよい。

後に、村井新七、村井権兵衛と共に、来盛近江商人の三始祖の一人にあげられている。最初に草鞋を脱いだ新七の年代に照合すると、市左衛門は20年ほど新七に遅れて来盛したことになる。村井市左衛門（村市）は、屋号として近江屋を名乗っているが、私の直系先祖である。ここで取り上げたのは、私の身内としてではなく、歴史に残る彼を通じて盛岡近江商人の活動、生き様についてご理解を戴きたいと考えたからである。

村市家の内情については、先祖の三百回忌（1985・7・26）まで、殆ど知られておらず、地元の著名な歴史学者森嘉兵衛博士すらその著述に殆ど触れていない。先祖の遺言によって他言が抑えられ、ベールに包まれていた。三百回忌を期して、13代の私は来盛近江商人の活動の歴史を正しく世に伝えることの必要性と責任を感じ、資料を公にすることを決意した。これを契機に、大正十三造氏「近江商人伝（1985）」、村井他人「村井・小野一族の系譜と概要（1992）」、村井久子（妻）「村市文書（2004）」等が公刊されている。

兄源太郎から店を引き継いだ市左衛門は、事業を拡大し多くの人を雇用し、各地に分店を開きながら、藩への経済的支援に徐々に係わるようになった。この間、多くの辛苦に耐えながら、経済的な基盤を固めた彼は、子孫へ心すべき遺誡、遺言を残している。遺誡を読み下すと、

「人富めば奢る。奢れば礼に背く。背けば人に憎まれる。憎まるれば災い来る。来たれば損となる。損となれば家貧し。貧しければ人賤し。賤しければ欲起こる。起これば邪を為す。為せば身亡ぶ。」

とし、これに古語を加え、「大福天命に有り、小福家業の力」として結んでいる。

遺言は、十五条に及び、この全文についてご紹介する紙幅は無いが、「仏教を信じ、ご公儀を大切に、主人父母に忠孝を尽くし、身の養生を第一に、諸事は中と忍の二字、家事第一に心がけ等々」、結びとして子孫には、財宝はともかくのこと、「浮世五常譲るべし」としている。この内容を考えると、単に自分達の子孫ばかりではなく、手代をはじめとする使用人にも諭す思いが込められている。この教えは、近江聖人中江藤樹の思想の影響を受けていることが察しられる。我が家の先祖は、誠に卓越した人材であったことを、改めて理解することができた。

商売をしている立場から、「主

小野慶三（1854～1920）（盛岡市先人記念館蔵）
小野組の支流芳野屋に生まれる。小野組の破産という悲運に合うも旧岩手銀行を設立し、盛岡金融界の発展に貢献、盛岡経済界の風雲児と呼ばれる。原敬を政界に押し出したことでも知られる。

小野清一郎（1891～1986）（盛岡市先人記念館蔵）
盛岡紺印井筒屋11代目、刑法学者で東京大学名誉教授。岩手県で3人目の文化勲章受章者

人たる者は、わが身持ちを正しくし、日頃の言動に留意し模範となること、使用人はよくよく人を見て、能力に応じて適材適所を考えること」など、教えの奥はふかいものがある。ここで、「浮世五常」とは、論語に言う「仁」、「技」、「礼」、「智」、「信」のことで、つまり心を大切にする子孫を残せということに尽きる。これらの教えは、至らぬ子孫である私たちとっては、及ばざることばかりであるが、近年、企業の社会的貢献（Corporate Social Responsibility）の原点として注目されている「三方よし」の考え方に通じるものでもある。

近年の末裔の傑人・小野清一郎（1891～1986）

盛岡近江商人の末裔は、今なお営々として商売で活躍している方々は少なくないが、商い以外の立場で活動され名をあげた人材もいる。近年における末裔の中の傑物の一人として、法学者「小野清一郎博士」をあげることができる。小野氏は盛岡市出身で、著名な刑法学者であり、検事、東京帝国大学教授、法務省特別顧問などを歴任された。昭和49年に改正刑法づくりのリーダーとして、「刑罰は応報なり」の客観主義的刑法論を展開したことでも知られている。

戦後、公職追放にも遭うが、歴史的に有名な「東京裁判」では、海軍側被告の弁護人をつとめている。旧制盛岡中学（現盛岡一高）から旧制第一高等学校に進み、東京帝国大学法学部独法科を首席で卒業する秀才であった。その後、検事、東京帝国大学助教授と進み、教授に昇進するものの、一時、教職不適格教授のレッテルを貼られ、公職追放にもなる。しかし、弁護士として登録、東京第一弁護士会長になり、以後、東京大学名誉教授にも推挙される。岩手県出身者としては、三人目の文化勲章の受章者となっている。

小野清一郎氏は、来盛近江商人「小野系」の末裔にあたる。家は、大溝井筒屋の別家で、同氏は盛岡紺印井筒屋の11代目にあたる。しかし、明治7年（1875）で小野組と共に家業が破産し、幼少の頃はたいへんな辛苦と闘いながら、学業を続けたようである。当時、交流のあった私の父から仄聞することによると、博士のご母堂は、我が子の学校を続けさせるために、働き続けたのであるが、まさに日々の生活に追われていた。家計の足しにと先祖代々のご絵像を、顔の部分だけ残して切り取り、表具屋で銭に変えていたとのことである。子息は母の期待に応え一心不乱に勉強し、立派に成長された。

博士は、優れた法学者であると同時に、熱心な仏教信者としても知られている。東京大学在学中に、後に盛岡市願教寺の院主となられた島地大等和上から教えを受けた。日頃浄土真宗を信仰し、とくに親鸞聖人に造詣が深く、博士の法哲学や刑法理論にも影響を与えたとされる。多くの法学関係著書以外に、『日本仏教の歴史と理念』、『歎異抄講話』などの仏教書も執筆された。博士の仏教を信じた気持ちは、近江商人の末裔の方々と共通の理念と考えられる。

村井　宏　略歴

1929年盛岡市生まれ。農学博士、静岡大学農学部教授、岩手大学大学院教授を歴任。吉林農業大学客員教授、日本林学賞（一九七八年）東北森林学会賞受賞。「みどりを守り育てる岩手県民会議」の会長。㈳東北地域環境計画研究会顧問。

近世の盛岡近江商人の活動
南部領に於ける近江高島商人の三始祖たち

岩手滋賀県人会・近江商人末裔会　会長　村井研一郎

一般に近江商人と言えば、湖東の出身を思い浮かべる人が多いが、南部盛岡へ進出したのは湖西の大溝、安曇川（現高島市）周辺の出身者だった。

この南部領に於ける高島商人の三人の始祖と言われるのが、村井新七、小野権兵衛、村井市左衛門である。

最初に来たのは、慶長18年（1613）に盛岡へ定住した村井新七で、盛岡の中心部の京町（現上の橋たもと）に店を構え、商いを始めると共に、近江からの後輩商人たちの「草鞋脱場」となり、近江商人進出の拠点となった。

そして、寛文2年（1662）、新七を頼って、小野権兵衛主元が盛岡へ下った。名目上、新七の養子となり、本姓を村井と改め商業に精励し、約十年後、独立して「志和近江屋」を創始、酒造業、質業を営み、盛業をきわめた。

時代は少し前後するが、万治元年（1658）、兄、源太郎の住む盛岡へやってきてその生業を引き継ぎ、呉服町に「近江屋市左衛門家」村市を構えたのが、村井市左衛門孝寛である。この三人の高島商人が盛岡に於けるパイオニアと言われる。

三始祖

この湖西高島商人と南部盛岡との結びつきのきっかけに一つのエピソードがある。

それは、最近までは高島郡田中下城村といわれた湖西の出身者、田中清六という鷹買い商人の存在である。彼は天正18年（1590）頃から北前船に便乗して北日本方面へと往復し、地方の大名や、豪族とのつながりを持ち、中央情報のパイプ役も果たしていたらしく、加賀の前田利家の差し金で、南部家を当時の中央政権へとりなしたと推察される。

これは、南部第46代当主、利文氏の談によれば、南部家を近世大名へと導いたのは利家公のお蔭であるとし、当主の名前に前田家の許しを得て、「利」と一字を頂くことになって居る由である。これをもたらした田中清六の出身地が湖西だったこともあり、高島商人の南部盛岡への進出の動機につながったのではと推察される。

さて、近江商人の卓越した商法ともいわれる「内和制度」なるものがある。

前述の先輩商人を頼って高島から来た商人たちは、先輩の下で商いを学び、実績を認められれば、親戚筋の者は「分家」として、奉公人だった者は「別家」としてそれぞれ「暖簾」分けで独立し、それぞれの本家を中心とした同族的団結を図り、販売力を維持発展させた。経営合理主義の追求から利益計算方式の仕組みつくりまで行われていたと言われる。

盛岡地元の商人たちも近江商人との取引関係を深め、子弟を村井、小野系列店に奉公させ、商法を学ばせ、或いは暖簾分け別家として、その組織の一員となる者もあり、近江直系でなくとも一団となって財閥的組織を形成した。

その二大勢力が小野権兵衛系と村井市左衛門系だった。

小野組について

この一方の小野権兵衛の系統は「小野組」として明治初期まで続き経済界の重鎮だった。前述の如く、志和近江屋を始めた村井（小野）権兵衛主元は、寛文年間（1670年）頃郷里高島から甥の善助包教、その弟権兵衛唯貞、更にその弟の清助嘉品の三人を呼び寄せ、彼らはそれぞれ盛岡で成功し、村井・小野の強固な地盤を築いた。中でも善助と権兵衛唯貞は、その商才・行動力に優れ、叔父権兵衛主元勝りの逸材だった。

権兵衛唯貞は主元の養子となり、村井姓に改め志和近江屋の2代となったが、その後小野姓にもどる。そして、権兵衛唯貞は、元禄3年（1690）京都へ進出、京都鍵屋の祖となり、兄の善助も宝永5年（1708）、別に京都へ出て、井筒屋の祖となり、京都を中心に、江戸、大阪へも進出、小野組の基盤を固め、盛岡南部の一族と京都、大阪との間に一大商圏を確立した。慶応3年（1867）、明治維新期には、三井組と共に「為替方」を命じられたのは、京都井筒屋7代目善助包賢だった。

そして、租税、国庫金の収納・支出を引き受け、付帯事業として、為替業務、年貢米売却、その代金を政府への収納業務などで巨利をあげる事が出来た。

明治6年、三井組と共に第一国立銀行の設立に関与した。しかし、明治7年11月、政府の急激な官金回収の政策変更へ対応出来ず、一転して経営危機に陥り、閉店の憂き目を見たのだった。政策変更を事前に察知して対策した三井組を除き、薩長閥との政争の余波を蒙り、破綻の

悲運に見舞われた。しかし、小野組の人材は残り、その遺風は一族や店員たちに受継がれた。その筆頭には後に古河鉱業の創始者となった古河市兵衛、盛岡出身の瀬川安五郎、一族の小野慶蔵、小野善助の弟、清助の井筒屋紺印店の11代目、文化勲章受賞の刑法学者、小野清一郎博士を輩出した。尚、7代目権右衛門は京都店を閉鎖し、南部へ戻り、石鳥谷へ店を持ち、小野組の別家筆頭の井筒屋弥兵衛の支えで商いを続け、その残した銘酒「七福神」は著名である。9代目権右衛門勝友は昭和38年（1963）、権右衛門家が京都の寺院に寄託していた大量の資料を大阪大学経済学部へ寄贈し、宮本又次教授によって、その全貌を明らかにする事が出来、日本一の商人史としてこの『小野組の研究』は学士院、賞恩賜賞受賞に輝いた。9代目勝友はほとときす派の俳人であり、昭和52年2月逝去、分骨は紫波本誓寺の墓所に納骨、年忌法要は別家筋の音羽会が営んでいると言う。

近江屋村市について

もう一方の始祖といわれるのは「近江屋村市」で、小野善助店と双璧の集団を形成し、三代目市左衛門篤胡は、延享4年（1747）頃、秋田の尾去沢銅山を盛岡商人組合で共同経営した。その後、天保6年（1835）、盛岡藩は新設の「銭札通用御会所」総裁に9代目村井市左衛門直方を迎え、藩領全域に藩札を発行した。しかし、その乱発による恐慌を引き起こし、折悪しく天保の飢饉と重なり、藩札の暴落、加えて幕府からの発行停止令を受け、村市をはじめ藩内の質店は破産同然の状況に追い込まれた。

盛業をきわめた近江屋村市も天保に至って閉店、文久2年（1862）には呉服町の店舗を再開したが、10代目は25歳で病没した。その後、次第に財政力は低下、加えて戊辰戦役に敗北、白石転封、士族であった村市家にも転封指示があったと見られ、士族返納の願いを出したのは11代市太郎の時だったという。村市家の13代目の当主、宏氏は岩手滋賀県人会・近江商人末裔会会長（発行当時）である。

昭和60年7月には、初代市左衛門孝寛の三百回忌法要を当地願教寺で営み、「親鸞上人行脚像」を寄進した信心深い家柄である。

鍵屋村井茂兵衛と尾去沢銅山事件

この村市の別家筋で著名な商人は「尾去沢銅山事件」の鍵屋茂兵衛である。

この先祖は和歌山の関戸の出身で関ヶ原の戦いに敗れ、南部に下向したといわれる。

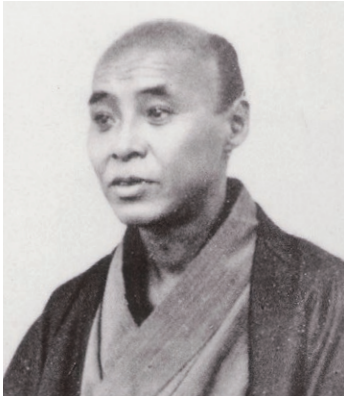
その後縁あって盛岡へ至り、享保年間（1716～35）頃近江屋市左衛門へ奉公し、次第に頭角を現し、暖簾わけで別家として独立、寛延2年（1749）初代茂右衛門が紺屋町に「鍵屋」村井家を興した。その後、南部藩ご用達を務め、150石の士分にとりたてられた。天保年間に二つの家系に分かれ、一つは村井源三家になり、8代で酒造業となった。もう一つが鍵屋茂兵衛家である。

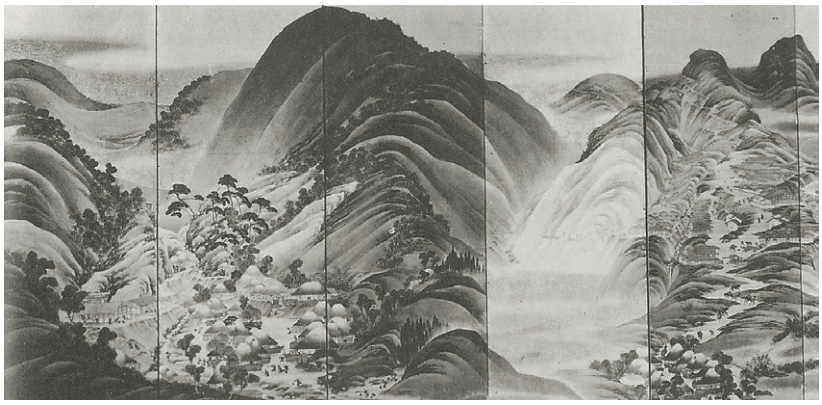
著名な4代目茂兵衛（文政4年～明治6年）の時には、近江屋、井筒屋系統を凌ぐ豪商となり、京都、大阪へも支店を持った。

明治元年、戊辰戦争時には、藩の要請により、鍵屋は軍資金として7万両を上納し、その代償として尾去沢銅山の経営権を任された。その戊辰戦争敗北の懲罰は厳しく、南部藩は13万石への減封、白石への転封を課されたのだった。これを免れるためには、70万両の賠償金を新政府筋に払わねばならず、その調達に迫られたが藩内での工面は不可能だった。

盛岡の近江商人関連年表

西　暦	元　号	内　　容
1566	永禄9	西川仁右ヱ門、商売開始
1573	天正元	織田信澄が大溝城の城主
1588	天正16	建部七郎右衛門、松前渡航
1599		盛岡城築城　南部利直
1603	慶長3	徳川家康　江戸幕府を開く
1610	慶長10	田付新助、江差に渡航
1613	慶長18	村井新七、盛岡に下る（盛岡近江商人団の始まり）
1615	元和元	大阪夏の陣　豊臣滅亡
1619	元和5	分部氏が大溝城に入る
1622	元和8	～25、小野則秀奥州に下ったとされる
1639	寛永16	鎖国令
1658	万治年間	～61、小野則秀、京・大坂などでの交易
1662	寛文2	初代村井権兵衛、盛岡に下り、新七家が草鞋脱ぎ場
1663	寛文3	則秀死亡
1664	寛文4	南部藩、盛岡南部と八戸南部に分かれる
1678	延宝6	初代村井権兵衛、別家して志和村で酒造業を始める
1682	天和2	初代小野善助（包教）叔父の権兵衛のもとで奉公
1689	元禄2	初代小野善助盛岡紺屋町で酒造業を始める「井筒屋」
1690	元禄3	善助の弟が権兵衛の養子となり京都で質店鍵屋開店
1700	元禄13	外村与左衛門が持ち下り開始
1708	宝永5	初代小野善助京都で糸・絹・紅花を扱う
1716	享保元	享保の改革
1734	享保19	中井源左衛門、持ち下り開始
1739	元文4	初代小野善助没
1747	延享4	盛岡商人組合で尾去沢銅山の共同経営開始
1749	寛延2	中村治兵衛が書置きを残す（三方よし原典）
1784	天明4	大溝藩から諸役免除、二人扶持
1807	文化4	蝦夷地が幕府領となる
1835	天保6	鍵屋、七福神の藩札発行
1860	万延元	桜田門外の変
1866	慶応2	小野宗家が大溝藩へ100両の調達金
1867	慶応3	大政奉還
1868	慶応4	鍵屋尾去沢銅山経営に乗り出す
1872	明治5	尾去沢銅山没収
1874	明治7	小野組破綻


村井茂兵衛（盛岡市先人記念館蔵）


尾去沢銅山

大阪詰めの勘定奉行、川井某は英国商人オールドから借り入れ契約をしたが、藩の上層部によって契約破棄され、その違約金を支払う破目となった。

川井は返済に困り、当時大阪の支店におった鍵屋茂兵衛に泣きつき、返済のための助力を依頼、資金運用のため、盛岡物産商社なるものを創設し、茂兵衛を名義上頭取として頼み込み、実際は川井が采配を振った。しかし、川井の放漫経営と浪費蕩尽でその経営は成り立たず、明治3年、政府の外債禁止令に藩名の出ることを恐れ、茂兵衛名義に契約書を書き換え茂兵術はこれによって数万両の損害を受け、かかる藩の失政を不法として告訴した。

大蔵省は明治4年12月、再調査に乗り出したが、その衝にあたったのが井上馨だった。この人物はなにかと金銭的に風評のある人物だった。

結局、明治5年3月、銅山を没収、銅山の経営を自分の近臣の岡田平蔵に下命し、まもなく岡田へ3万6100円、15年年賦で払い下げた。

時の司法卿、江藤新平はこのやり方に疑念を抱き茂兵衛の訴えを取り上げ、銅山経営移転のいきさつの徹底調査を命じた。調査が進むにつれ、不当なやり口が明らかになり、井上は拘引逮捕されるのを恐れ、長州閥の木戸孝允に泣きつき大蔵省敗訴、井上は罰金30円で済んだのだった。

運わるく、征韓論による西郷との失脚で江藤が下野してしまい、茂兵衛の訴えはかなわず、これが契機で鍵屋茂兵衛家は没落したのだった。

結局、藩の上層部の不見識や権力の悪用、国の実力者の欲望が一商人を没落させた例で、小野組の没落、北海道開拓地払い下げ、尾去沢銅山事件と明治初期における三大疑獄事件と称される。

むすび

顧みると約400前に近江から遥々東北の地まで、苦難を乗り越えての旅を続け、南部の地に定着し、更に南部での基盤を固めた上、京都、大坂、近江と広範な商圏を築いていった先たちの迫力は驚くべきものである。明治以降の急速な変遷の中、商業立国の先達を果たしたのが近江商人といえるのではないだろうか。

近江から進出して商いを営んだだけではなく、地域の人々とも同志的共生を図り先進的経管に尽力したのが彼らの真骨頂であろう。盛岡高島商人の中心となった村井・小野一族は元は武家出身と伝えられ、その家訓には「仁義礼智信」とあり、武士道の儒教精神と庶民的浄土真宗に心の拠りどころを求めたと言われ大変信心深いものがある。

地元の滋賀県に於いて近江商人の知恵と理念に関して、「売り手よし、買い手よし、世間よし」の三方よしの理念を地域社会に広める運動があるという。

商業の地域社会への貢献こそ近江商人の先達たちが願った事であり、現代社会にもっとも望まれる精神であろう。

村井　研一郎　略歴

1930年盛岡市生まれ。京都大医学部薬学科卒業後、創業1857年の株式会社村源を継ぐ、卸売りを分離した村研薬品を設立。県薬剤師会会長や、村研薬品の後身となるバイタルネット（本社・仙台）の顧問などを歴任。

てんびん棒

最初に盛岡に出かけた時の一番の感動が盛岡市立先人記念館で見た合羽だった。私の先祖様が扱っていたこともあり、同郷で一番の生産量を誇っていた丸田屋さんの製品だったからだ。

それはさておき、今回の情報紙では、来盛400年記念事業として発行された報告書や記念式典当日に配布された「活動の軌跡と記録」から抜粋させていただいたが、事務局の所在地が以前と全く同じだったことに驚いた。近江屋さんという屋号のホテル経営をされていたご主人なき後、ご家族が代々事務局を引き継いでおられるとのこと、何らかのご縁で滋賀から岩手にやってきた人、ご先祖が近江商人の方、そんな人々が近江商人をキーワードで結ばれている岩手滋賀県人会・近江商人末裔の会は、東日本大震災では、被害を受けた会員も少なくはなかったものの、当地での交流を盛んにし、出身地滋賀への熱い思いを心に秘め、ゆったりとしながらも確実な活動を展開されていることにさわやかな風を感じたものだった。

第53号
発行／特定非営利活動法人三方よし研究所　〒522-0004　滋賀県彦根市鳥居本町六五五―一　TEL〇七四九（二二）〇六二七　E-mail office@sanpo-yoshi.net　URL https://www.sanpo-yoshi.net/